生活環境とユニヴァーサル化

堀田 明裕 (千葉大学)

Living Environments and Universalization of Life
Akihiro Hotta (Chiba University)

1.はじめに

1994 年に高齢社会 (65 歳以上の人口が総人口の 14%以上を占める社会) へ突入した我が国¹⁾は、社会システム等に様々な問題が生じている。生活環境の問題もその一つで、現状の生活環境は加齢で身体機能が変化した高齢者や身体に障害を持つ人等身体的ハンディキャップ者にとって使いにくく危険であるなどと指摘されている。これらの問題の基本的原因は、従来の生活環境が主に成人健常者を対象使用者としてデザインされてきたためである。このための解決方法として、現状の生活環境の不都合の部分除去するというバリアフリーデザインが進められてきた。しかし、既存の生活環境を改善する場合は、新たな工事とコストがかかり、デザインにも無理が多くなる。また、既に生産・流通ルートにのっている製品の一部に特別の仕様を入れるデザインは、製品のコストアップにつながりマーケティングの枠外として扱われてきた。

高齢社会の出現によって、従来の少数集団に対する生活環境デザインの考え方が今大きく変わろうとしている。高齢社会は従来成人健常者の社会において多様な身体特性を持った少数集団の人達が、多数集団として大きな比率を占めるようになり、その結果高齢社会の生活環境問題は高齢者だけの問題ではなく、社会全体の環境の質的変化の問題として捉えなければならない。そのため、生活環境デザインの視点や方法も、従来のバリアフリーデザインからの変更が求められている。

2.バリアフリーデザインからユニヴァーサルデザインへ

以上の状況に対してユニヴァーサルデザイ

ンという概念が我が国でも今大きな流れとなってきている。ユニヴァーサルデザインは、1975 年アメリカ・ノースカロライナ州立大学の故ロン・メイス氏が提唱した概念で、すべての人が使用可能で受容できるデザイン (design for all) という考え方である²⁾。

成人健常者を使用対象者としてデザインされた既存環境の修正をバリアフリーデザインとすれば、ユニヴァーサルデザインは当初からすべての多様な特性・行動要求を持った人達を配慮したデザインといえる。ユニヴァーサルデザインはすべての市民の生活行動の確保という理念の確立や、できる限り多くの人々ができるだけ長く自立することによる社会的、経済的負担の低減、また、新たな生活環境の視点による新商品の開発というマーケティング上のコンセプトの可能性など様々な方向で検討され始めた。我が国でもユニヴァーサルデザインという名称ではないが、1980 年代に既に上記の方向で通商産業省が新住宅プロジェクトの一環として高齢者、障害者ケア住宅の開発³⁾が進められ、また、E&C プロジェクトのバリアフリーの商品開発⁴⁾、行政関連の研究会・委員会や標準化の動き、関係学会のユニヴァーサルデザインに関する一連の研究会等の活動が行われてきた。

3.ユニヴァーサルデザインの問題

以上のように我が国では高齢社会を境に、生活環境の新たな方向が模索され始めた。ユニヴァーサルデザインの基本的方向は、年齢や能力にかかわらずすべての人が使いやすく安全な生活環境デザインの構築と言えるであろう。しかし、この方向、理念を具体的なデザイン、技術としてブレークダウンしてい

くにはいくつかの問題をクリアしなければならぬ。すなわち、デザイン作業を進めるには次のような問題がある。

- 1) デザインの目標：すべての人とその生活環境がどのような状況になることをユニバーサルデザインの目標とするのか。デザインの種々の要求性能との関係をどのように調整するのか。
- 2) 対象ユーザの問題：ユニバーサルデザインはすべてのユーザが利用できるデザインといわれているが、実際のデザイン作業ではすべてのユーザを設定しなければ具体的なデザインはできない。すべてのユーザをどのように設定するのか。
- 3) デザインの対象：ユニバーサルデザインの目標を達成するために何をデザインの対象と考えるのか。個別のモノがデザインの対象となるのか。
- 4) ユニバーサルデザインの具体的方法の問題：前述 1), 2), 3) が設定されなければ具体的なデザインにブレークダウンできない。
- 5) ユニバーサルデザインの評価の問題：前項と同様、1), 2), 3) が設定されなければ評価ができない。
- 6) デザインを進めるにあたっての人間特性データの問題：高齢者、身体障害者等従来少数集団であった人達の特性データの整備がなされていない。

4. 生活のユニバーサル化

以上の問題を考慮して、本論では個別のモノのユニバーサルデザインではなく、生活のユニバーサルデザイン（ユニバーサル化）の方向を試みる。すなわち、すべてのユーザの生活行為と環境との関係にハンディキャップの起因となるミスフィットが生じない生活環境システムデザインを生活のユニバーサル化と設定し、そのための条件として以下の方向を提案する。

- 1) ユニバーサル化の基本目標を、すべてのユーザの生活行為が安全・容易に自立できる環境システムの構築とする⁵⁾。そのためには生活行為を構成する生活動作とそれに

必要な環境との関係を検討する。

- 2) 対象ユーザとは、生活行為に必要な環境とのミスフィットによってハンディキャップを被るすべての人とする。具体的には生活動作の基本行動となる移動、情報（情報の入出力、理解）、動作・操作、環境適応行動に環境との関係・状況によってハンディキャップを被る人である⁶⁾。
- 3) 生活行為を自立させるために提案されたシステムデザインは使用方式（個人、家族、不特定多数の使用）との関係で、生産・使用の合理性、経済性の視点から評価し、個別使用、共用、併設・併用などの方向でできる限り一般解に近づける。特殊解しか得られないデザインも一般解との連続性（空間的、時間的、維持・管理）を確保する。

5. 今後の方向

- 1) 現状の生活環境との関係で、すべてのユーザの生活行為の自立を阻害するミスフィットとそれに起因するハンディキャップを分析する。
- 2) 抽出されたハンディキャップに関係するすべてのユーザの許容範囲等の人間工学的データを整備する。
- 3) すべてのユーザが許容できる技術と仕様をもとに提案されたシステムデザインを評価する方法を確立する。
- 4) 社会的に定着し、固定したデザイン方式・技術は標準化、システム化を進める。

<文献>

- 1) 総務庁編：高齢社会白書平成9年版(第3刷), 1, 1998
- 2) R. L. Mace: A Perspective on Universal Design, UD News line, Vol.1, No.4, 1998
- 3) 通商産業省：高齢者・身体障害者ケアシステム技術の開発, 同報告書, 1980-1984
- 4) E & C プロジェクト編：バリアフリーの商品, 同2, 日本経済新聞社, 1994, 1996
- 5) 堀田明裕：生活環境におけるユニバーサルデザインチェックリストの検討, 日本人間工学会第39回大会講演集, 186-187, 1998
- 6) 堀田明裕：高齢社会におけるデザインの方向, デザイン学研究, Vol.44, No.3, 1997